



公開対談シリーズ第13回
NINAGAWA 千の目

ジーンズに濃紺のジャケットで現れた、歌舞伎役者・市川亀治郎さんは爽やかな、知性の漂う好青年そのもの。しかし芝居談義がはじまると、蜷川幸雄にぶつける演出家とは、プロデューサーとは、という質問に熱い真剣さがほとぼしる、そんな対談となった。

(財)埼玉県芸術文化振興財団 芸術監督・演出家

歌舞伎俳優

蜷川幸雄 × 市川亀治郎

通常の女形がやってはいけないことのフルコースで

蜷川 (以下N) 市川亀治郎さんです。歌舞伎座でやった『NINAGAWA 十二夜』で御一緒したのですが、とても優秀なおかつ論理的な俳優さんですので、是非お話を聞かせていただきました。

市川 (以下I) こんにちは。今日はお招きいただき、ありがとうございます。

あの時は『NINAGAWA 十二夜』の上演が決まっても何も読まなかったし、結局何もわからないままで行きました(笑)。ただ僕の中では読み込んできて、自分の中で演技を全部組み立てると、演出家に一個ダメ出しを食らうと全部崩れてしまうことがあるので、それなら白紙で行って、演出家に言われる通りにしようと思っていたんです。そうしたら、蜷川さんが僕の麻阿役について一言「この女は物を食ったり、酒を飲んだり、本人がいなかったらそいつの悪口を言ってイヤらしい話に興じている人物だよ」と

話された。「あっ、解った」と思いました。それで、歌舞伎の女形がやってはいけないことを全部やろうと思ってやったんです(笑)。だからこれは歌舞伎の女形が絶対しないことを全部やったことによって出来た「新たな女形像」だったのです。例えば普段は立役より立ち位置は絶対下からなくては行けないが、立役より一歩前に出るとか、人が台詞を喋っている時は動いてはいけないのを全部動くとか。

N 知らない間に上手から下手へはいつくばり移動していたりね。

I だからいけないということをやったら本来の女形像が崩れるはずが、このシェイクスピア、特に蜷川さんが演出した『十二夜』がそれで成立して、新たな女形像が誕生したのは僕には驚きなのです。

N こんなうまい人がいるのだと驚きました。とても面白くて楽しかった。

I 役づくりで小物の研究に凝る方は凝ると思いますが、僕などはやはり着こなしますね。どうやったら色気が見えるかと。麻阿

全然笑いは不得意なんです。だけどその一芸を開いてくださったのは、『十二夜』の蜷川さんの演出のおかげかな、と。(市川亀治郎)

は御殿女中でしたから初演の時はきっちり着ていたが、再演の時から少しあばずれっぽいところがあったらいいと思ったのです。それで衣裳を着た後に四股を踏みました。女形の衣裳を着た時に、必ず四股を踏んで着崩れ、ゆるく出ていくと、肩の線がちょっと出るから下品に見えるわけです。麻阿は当初はびしっとした髪型だったのですが、額の横に一本髪の毛を出すことによってちょっと男にだらしないうところを表現したりとか、自分なりにその新たな女形の見え方を考えました。

プロデューサー、演出家として考えること多きこの頃

N 今の松本幸四郎さんが染五郎の時代に勉強会「木の芽会」があって、それを観に行ったことがあります。「若い歌舞伎の役者さんたちは会を立ちあげて、こうやって勉強するんだ」と思いましたが、亀治郎さんも特別な思いがあってご自分の会をお作りになったのですか。

I 理想の配役でしかも自分が全責任を取ってやる形を考えた時に「自分で全部お金を出してやればいいんだ」と自然に思いました。だから初めは銀行に行くところから始まりますよ。銀行も利益を出すものなのか、出さないものなのかと判断に困らしいです(笑)。

N 一つ目の作品は何でしたか。

I 玉手御前、『撰州合邦辻』です。すごく戯曲が面白いのになんでこんなに退屈なのだろうと近年の舞台を思っていたんです。やってみますと合邦は作品とか着眼点はすばらしいが、何がだめにしてしまったかという、先人の役者の勝手に戯曲を無視した工夫、表面だけの解釈でやってしまった工夫が作品をつまらなくしたと気づきました。だからそういうのを一切やめて、原本に戻してやってみようということでやったら意外と面白いという声をいただいたのです。

N 僕は戯曲でしか読んでないが、『合邦』って面白いですよ。

I だから前半の台本作りはいろいろな資料調べたりで大学の卒論を書いている気分でした(笑)。

N ということは、自分がプロデューサーであり演出家であり主演であるということですね。昔の一座みたいな。

全部がわかりすぎると無理難題が言えなくなるというのがありません。だから演出家は我を張る勇氣も必要な場合があります。何を守って、何を捨てられるかだと思いますが。

I 結局戯曲のカットも同じではないですか。どこの場面を犠牲にするかです。

N 僕は7月に上演する井上ひさしさんの『道元の冒険』(’72年)という、道元を主題にした芝居の準備をしていますが、その台本が4時間、5時間かかるくらいに厚いんです。その後上演された『新・道元の冒険』の台本があるので、新旧を見比べなが

らカットをしてみました。そうすると大変な作業でね。作家は書くことに命をかけているということがあるから、うっかりカットもできなくて、鬱々たる日々を送っているところなんです。

I 4月の公演『風林火山』では、稽古に入る時「初日に台詞を覚えてこないでくれ。台詞を覚えられなくてカットするのが忍びなくなるので、絶対覚えなくてください」と演出としてお願いしました(笑)。どうしてかという僕は書きを台詞にしているものから、役者が何回も稽古して入れれば良いわけだと座付き作家が言ってくれました。この人とはとてもやりやすかったです。一字一句厳しい人がいますが、歌舞伎役者は一字一句めちやくちやですからね(笑)。

プロデューサーなどが見に来て、「この芝居面白いね」といった場合、喜んでいいのか、そういうのも難しいですね。

N 僕は一切そういうのは信用していません。僕は客入れの時は受付付近にいて、芝居中は客席の一番後ろで見えています。「俺は千の目が入っている観客なんだ」と思いながら、お客さんの反応を背中越しに見て、自分の目でマイナスすることを厳密にチェックして舞台をジャッジするんです。「よし大丈夫」「失敗した」と密やかに。俳優は前線で戦っているの、批評が良かろうが、悪かろうが常にお客さんの前でやらなければいけないので、彼らを僕が守ります。

I そのあたりでは役者を自分でもやっているせいか、演出家は役者に気を使ってやるとだめだなと感じています。どうですか。

N そうですね。僕は傷つけた方がいいと思うところは傷つけてしています。

I どうやって傷つけるのですか。その傷つけ方を教わらないと。テレビの芝居でも、自分の芝居以外では気を抜いている人がいて、舞台との違いに驚いたのです。そういう時はどうしたらいいんですかね。

N そういう時は物をぶつけた方がいいですよ。

I 今度投げ方を、タバコを吸わないので灰皿がないのです(笑)。

N 靴! 靴もちょっと外れるように投げる。靴の投げ方を教えたところで終わりです(笑)。今日はどうもありがとうございました。

NEWS 「知らざあ言って聞かせやしょう!!」の名台詞。7月の熊谷会館で開催される、松竹大歌舞伎『白浪五人男』に弁天小僧で出演決定。詳細はP.22



profile: 市川亀治郎 (いちかわ かめじろう)
1975年東京生まれ。四代目市川段四郎の長男。慶應義塾大学文学部卒業。1983年7月歌舞伎座「御目見得太閤記」で二代目市川亀治郎を名乗り、初舞台を踏む。以降、立役から女形まで意欲的に活躍し、蜷川幸雄演出の『NINAGAWA 十二夜』にも出演。最も目の離せない歌舞伎界の若手の一人。NHK大河ドラマ『風林火山』で演じた武田信玄は、テレビ初出演とは思えない存在感を放ち話題となった。この7月には熊谷会館・松竹大歌舞伎の『白浪五人男』に出演、女装も美しい弁天小僧の好演が期待される。